

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2016  
“ふしぎ文学の達人”が選んだ「怪談」のオススメ本

選者：小泉凡氏  
(小泉八雲曾孫・民俗学者)

選者コメント

2. 『ケルトの薄明』

W.B.イェイツ著 井村君江訳  
筑摩書房 1993年

◆妖精の国アイルランドを代表する詩人・フォークロリストで、ノーベル文学賞受賞者でもあるW.B.イェイツが、幼い頃に親しんだ北西部のスライゴー地方に伝承される妖精譚を、同地の老人パティ・フリンから聞き書きして綴った妖精精物語集。座敷童のような家つき妖精、山童のように仕事を手伝う妖精、幽霊譚、神隠しなど。ユーラシア大陸の両耳に位置するケルトの異界と日本の異界の思わぬ類似に興味をそそられる。

4. 『輪廻転生

—く私をつなぐ生まれ変わりの物語—』  
竹倉史人著 講談社 2015年

◆世界的な視野で「生まれ変わりの物語」を蒐集、類型化を行い、輪廻転生の全貌にわかりやすく迫る。小泉八雲が再話して世界に広めた「勝五郎の再生譚」が、後にヴァージニア大学の精神科医イアン・スティープンスン教授の琴線に触れ、医療資源としての前世記憶の研究が始まった経緯が説かれる。「高齢化社会」から「看取り大国」への道を進む日本にあって、生死をより自由に考えるきっかけをも与えてくれる。

1. 『新版遠野物語 付・遠野物語拾遺』  
柳田国男著 角川書店 2004年

◆民俗学に黎明を告げる柳田國男の代表作のひとつとしてあまりにも有名だが、内容はまさに、遠野の人、佐々木喜善の話を「感じたままに」書きとめた怪談集。物語には里人が暮らす人間世界に対峙する山＝異界への畏怖の念が底流する。またアイルランドの詩人W.B.イェイツの『ケルトの薄明』を意識した怪談の世界性をも視野に入れた、奥深い一書。

3. 『あの世からのことづて』

松谷みよ子著 筑摩書房 1984年

◆先年、あの世へ旅立たれた松谷みよ子さんが、各地で聞いた身近な話 62 編を収めた現代の怪談。学校や軍隊の怪談、夢、生まれ変わり、神隠しなど。著者自身もそれを「あったること」(事実)として受け止め、とつとつと語る。とくに岩手県の山村の少女が神隠しにあい、多摩の青梅で発見された話には強い実話感を感じる。この世とあの世を結ぶ人智を超えた力の存在が浮き彫りにされている。

5. 『なぜ怪談は百年ごとに流行るのか』

東雅夫著 学研パブリッシング 2011年

◆文化文政時代(200年前)、明治末から大正時代(100年前)、そして現代という100年周期であらわれる怪談隆盛期の歴史的考察とともに、怪談黄金時代の主要な作家と作品を怪談学の第一人者の高い知見によって解説する魅力的な怪談入門書。100年前の怪談ブーム期に生まれた『遠野物語』を、成り立ち・内容ともに「怪談実話集」と位置付ける筆者の卓見に共感する。

選者：金原瑞人氏  
(翻訳家・大学教授)

選者コメント

6. 『ぼくが消えないうちに』  
A.F.ハロルド著 こだまともこ訳  
ポプラ社 2016年(小学生高学年向け)

◆子どもはよく想像の友だちを作ることがある。だけど、大きくなるにつれて、その友だちのことなんか忘れてしまう。忘れられた友だちはどこにいくんだろう。もしかして、そんな友だちを食べる怪人がいるとしたら……きみは、その友だちを守り切れるか？ バミューダパンツに派手なプリント柄のアロハシャツを着て、サングラスをかけたおじさんがこわい！

7. 『最後のゲーム』  
ホリー・ブラック著 千葉茂樹訳  
ほるぷ出版 2016年(小学生高学年向け)

◆「このボーン・チャイナ(粘土に牛の骨の粉をまぜて焼きあげた磁器)の人形には、女の子の骨の粉が混ぜてあって、体の中にはその遺灰がつまっている、これからこの人形を埋葬しにいくから着いてきて」ポピーはそう言って、ふたりの友だちといっしょに深夜、バスに乗る。次々に不気味な事件が起こり、三人の関係もぎすぎすしてくる。それに行き先は墓地！

8. 『さよなら、シリアルキラー』  
バリー・ライガ著 満園真木編  
東京創元社 2015年(中学生以上向け)

◆女性の殺人現場を双眼鏡でみた17歳の少年ジャズは、連続殺人犯の犯行だと確信し、犯人を追う。相手の心理も手口もよく知っている。なぜなら百人以上の人間を手にかけて連続殺人犯である父親からそれを教わってきたからだ。ジャズは無理解な警察にいらだちながらも、自分のことを怖れている。父親の血を引いているからだ。自分もいつそんなふうになるか。そんな恐怖と戦いながら犯人に迫っていく。

9. 『チェルノブイリの祈り』  
スベトラーナ・アレクシエービッチ著  
松本妙子訳  
岩波書店 2011年(中学生以上向け)

◆1986年、ウクライナの首都チェルノブイリの原子力発電所で大事故が起こった。その多くの体験者や関係者から聞き取りをして、まとめあげたのがこの本だ。身の毛がよだつ事故の様子、その犠牲者、いたましい遺産が生々しく語られる。しかしそんななか、希望と愛を忘れることなく生きていく人々、死んでいく人々の物語は心を打つ。底知れない恐怖と、最高の感動を与えてくれる1冊。

**選者：東雅夫氏**  
**(アンソロジスト・文芸評論家)**

10. 『日本警見記』上・下

小泉八雲著 平井呈一訳 恒文社 2009年

選者コメント

◆すでに『怪談』や『骨董』は既読だろうという前提で、八雲の著書から「怪談」の括りで一冊を選ぶとすれば、私は断然、本書を採る。日本という国に残存する深秘の闇の奥を、五感を駆使して感じ取ろうとする「マレピト」八雲の驚異旅行記。名品「盆踊り」から「潜戸——子供の亡霊岩屋」を経て「日本海に沿うて」に到り、有名な「鳥取のふとん」や「こんな晩」の怪異談に接するフルコースは、われわれ日本人にとっても、清新な「怪談との遭遇」体験をもたらすはずだ。

11. 『松江怪談』

高橋一清編 今井出版 2015年

◆八雲が松江の地に蒔いた「怪談」の種は、百年余を経て、大輪の花を咲かせている。観光客に大人気の「松江ゴーストツアー」しかり、小泉凡さんの教え子たちが取り組んでいる「怪談土産」プロジェクトしかり。本書の編者が編集統括を務める雑誌『湖都松江』の一連の取り組みも、その一翼を担うひとつだ。同誌に掲載された山田太一、辻原登ら識者の談話や「新作怪談」公募の入選作、松江の伝説紹介、さらに八雲自身の松江怪談までを収めた本書は、その精華といえよう。



12. 『夢魔は蠢く 文豪怪談傑作選・明治篇』

東雅夫編 筑摩書房 2011年

◆八雲の怪談を考えるうえで、忘れてならないのが、夏目漱石の存在である。周知のように、両者の経歴には因縁めいた交錯があるのだが、作品の面でも看過できない共通点が垣間見える。そのことは、来日前のハーン（八雲）が米国南部で執筆した夢と幽霊の小品集『きまぐれ草』所収の諸篇と、漱石の「夢十夜」との驚くべき照応関係に端的に顕われているように思う（ちなみに『きまぐれ草』は、あのラヴクラフト鍾愛の作品でもあり、ドリームランド小説の源泉とも考えられる）。両作に加えて、正岡子規や水野葉舟の夢怪談を収めた本書が、日米怪談文学史におけるハーン／八雲の位置づけにいささかなりと寄与するならば幸甚である。

リストの12冊（シリーズ含む）は、  
田原市図書館で貸出・予約可能な資料です。

2016.10 作成